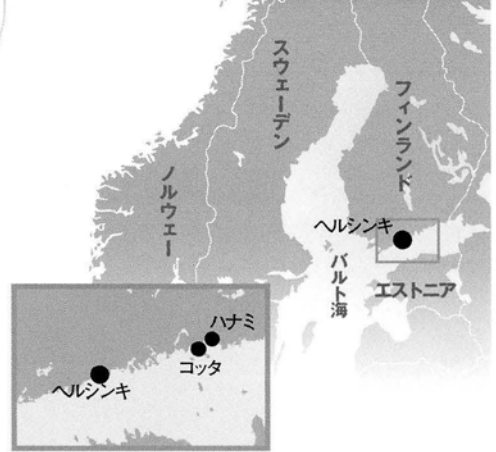


World Watching 53

ワールド・ウォッチング
Marina



市民の日常生活にとけ込む フィンランドのマリーナ



鈴木 洋

社団法人日本マリーナ・ビーチ協会
マリーナのあり方研究会 委員長
(株式会社地域開発研究所 港湾海洋部
主任研究員)

本稿は、わが国のマリーナのあるべき方向を考察するシリーズの第2回として、ヘルシンキ周辺を中心に、市民の日常生活にとけ込んでいるフィンランドのマリーナ事情について紹介する。



フィンランドのプレジャーボート事情

フィンランドは、バルト海の最も奥に位置し、国土の1/4は北極圏である。このため、最も南に位置する首都のヘルシンキにおいても、冬季は氷点下30度以下になることもある。フィンランド沿岸の海水の塩分濃度は日本沿岸の1/10以下の0.3%程度であり、干満差もほとんどないため冬期は凍結する（最近では氷砕船により本船航路等は確保されている）。もちろん、湖も凍結する。このため、プレジャーボートは10月末から翌年4月まで、マリーナやその周辺の敷地に揚げられるか、自宅に保管される。つまり、プレジャーボートの活動期間は約5ヶ月間と制限されている。

しかし、フィンランドのプレジャーボートの保有隻数は75万隻、保有率は国民7人で1隻を有する状況にあり、保有隻数で日本の約2.2倍、保有率は約52倍と世界でトップレベルである。では、これだけ多くのプレジャーボートがどのように係留・保管されているのだろうか。

フィンランドは、国土の10%に及ぶ約19万の湖沼が存在し、海岸には4万以上の群島が点在している。この湖面や海岸の棧橋に係留されているものが中心であるが、自宅に陸上保管されているものも少なくない。



フィンランド人の生活とマリーナ

フィンランドは6月中旬から8月中旬まで学校が夏休みとなる。社会人は通常5週間の夏季休暇をこの期間に取り、家族や友人でプレジャーボートのある別荘等に滞在したり、プレジャーボートで各地を巡るといった楽しみ方をしている。これらの余暇活動を支えているのがマリーナである。

フィンランドのマリーナは、日常的に係留するためのマリーナ（いわゆるホームハーバー）以外に、立ち寄り型のビジター用マリーナが、以下に示すように4つのグレードに区分されている。

ビジター用マリーナのグレード

- ①Excursion : 何もない島影等の水域のみの施設
- ②Visitstage : 棧橋のみの必要最低限の施設
- ③Service : 宿泊はできないが他は整っている施設
- ④Guest : 総合・複合型の施設

※③、④は、ホームハーバーと一体の場合も少なくない。
※資料：「Visit harbours」The Finnish Maritime Administration、2003

また、自宅や別荘に陸上保管しているプレジャーボートを湖面や海面に降ろすためにマリーナには必ず斜路が設置しており、平日就業後にプレジャーボートを楽しむ人も少なくない。

さらに、無数に存在する無人島には、①や②のグレードの施設が整備されており、土日にキャンプ、バーベキュー、散策、日光浴、海水浴、サウナ等を日帰りや一泊で気軽に楽しむライフスタイルが確立されている。

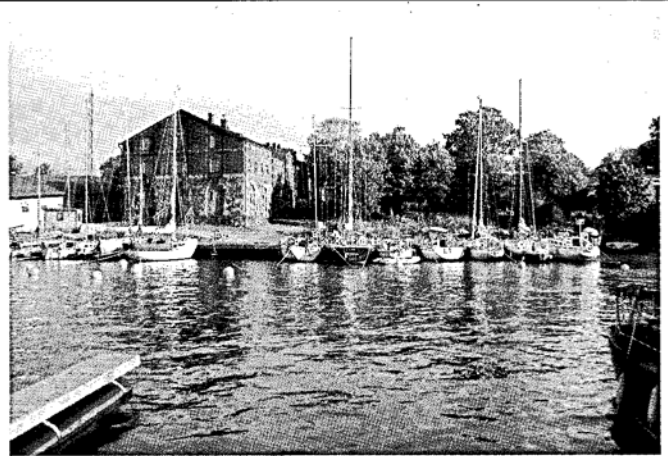


フィンランドのマリーナの整備・運営主体

これらのマリーナの棧橋は、公共（主に市町村であるが、一部、国もある）の整備によるもので、地形を活用し、静穏な水域に外郭施設を設けることなく簡易な棧橋が設けられている。グレードによっては、給油、給水、給電施設等が棧橋に設置



係留施設の背後は一般市民の利用可能なオープンスペース。オープンスペースは冬季陸上保管スペースとなる。(フレディークスハムン・ハーバー)



ヘルシンキ中心部から約3kmに位置する世界遺産にも指定されているスオメリナ要塞の島のハーバー。クラブハウスやレストランは古い建物を保存・改修し、利用しており、年間7千隻のビジター艇が訪れる。(スヴェアボリィ・ハーバー)

されているものの、わが国の感覚ではディンギー専用のヨットハーバーに近い。

しかし、わが国のヨットハーバーと大きく異なる点は、敷地境界がなく、柵等で覆われるということもなく、ほとんどの水際線が一般市民に開放されている点である。例えば、③「総合・複合型の施設」の代表的な事例として、ヘルシンキの東、約300kmに位置するハナミ市のフレディークスハムン・ハーバーが挙げられる。ここは、棧橋の他、背後にクラブハウス、レストラン等が立地しているが、十分なオープンスペースの中に施設が配置されているため、海陸の施設が海辺の公園として一体感を持ち、町とつながったかたちで存在している。

一方、マリーナの棧橋以外の施設整備・運営は、地方自治体、または、地元ヨットクラブ等が行っている。例えば、ヘルシンキより約280km東のコッタ市にある100年以上の伝統を持つコッタヨットクラブは、クラブハウス、コーヒーショップを所有し、レストランやショップ等は民間事業者に賃貸している。その他のサウナ、棧橋等の施設は市が所有しており、運営はヨットクラブが受託している。

レストラン等の施設を所有するヨットクラブや市は、約5ヶ月の活動期間中にビジターが多く来訪することが地域の活性化、あるいは、ヨットクラブの収入につながると考えている。このため、棧橋の背後でレストラン等が質の高い営業を行うことを望む。ヨットクラブや市は、レストラン等の営業を行う民間事業者と契約する場合、都市部とは異なり、例えば、5ヶ月間のみの契約をする等、民間事業者がこの期間だけで十分採算が確保できるような賃貸契約を交わしている。



地域に根ざしたヨットクラブの特徴と役割

フィンランドのマリーナを運営するヨットクラブは、欧米やわが国にも一部存在する格式、格調の高いヨットクラブとは異質である。入会に際しての制約はなく、年会費を納めれば、地域住民が気軽に入会

することができる組織である。もちろんプレジャーボートの所有の有無に関わらず入会可能である。

ヨットクラブは、地域住民が幼少の頃よりプレジャーボートと親しむためのヨット講習会から国際的なトップレーサーが受ける講習会まで受講者のレベルに応じて開催する等、地域の海洋性レクリエーション普及・啓蒙活動を積極的に展開している。さらに、夏季限定のプレジャーボート活動だけでなく、様々な通年型イベントの企画・運営等を行い、地域住民はマリーナをコミュニティの拠点、社交の場として活用している。



おわりに

このように、フィンランド人は、物心がついた頃にプレジャーボートと出会い、地域生活の中でごく自然な形で海洋性レクリエーション活動を楽しむ。その活動拠点がマリーナであり、その活動は地域に根ざしているヨットクラブ中心に展開されている。また、多数のビジター用マリーナの存在がその活動に幅を広げている。

わが国の場合、プレジャーボート活動の中心は釣りであり、一部の裕福な人々の贅沢な遊びという印象がまだ、拭えない面がある。しかし、フィンランドでは無人島を巡るなどのクルージングが中心であり、その拠点となるマリーナは、公共が道路や公園を整備するかのごとく、当たり前にならぬ程の施設を提供している。

わが国とはプレジャーボート普及率、海象条件、国民性等、様々な相違がある。しかし、今後のわが国のマリーナのあり方を考える時、背後地までを含めた公共を主体とした一体的整備と、その施設をヨットクラブ等市民、民間事業者の力を借りて運営しているフィンランドの手法は、日本における公共マリーナの整備・運営手法に重要な示唆を与えている。特に、施設整備、管理運営におけるヨットクラブと行政の役割分担は、NPO等の活動が活発化するわが国において注目すべき点であると考えられる。